



[今月の聖書]

C20・03 『香油のかおり満つ』

「その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一斤を持ってきて、イエスの足にぬり、自分の髪の毛でそれをふいた。すると、香油のかおりが家にいっぱいになった。」 (ヨハネ 12:3)

イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう。」 (ヨハネ 13:3-7)

「この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである。」 (マルコ 14:8,9)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は主の御苦難を想うレントの期節に入りました。特にヨハネが語った福音書の中から美しいひとつのエピソードをご紹介します。 「福音とは逆説的です」。最も弱いものが、最も大切な役割を果たし、最も小さい業が、また全世界に影響をもたらします。一雫の涙のような献身的な行為が、全世界に喜びをもたらすことになったのです。主の十字架の6日前に、ベタニアのマリアがナルドの香油を注いで、主の足に塗り、髪の毛で拭いたという記録があります。ヨハネは「高価で純粋な」と書き加えています。弟子たちが「もったいない」と批判した時、主は「いや、この女の純粋な信仰の行為は、全世界でいつまでも語られる」と宣言したのです。彼女は有名になることも、周囲の人々!

の賞賛も考えていませんでした。ただ、イエス・キリストの苦しみを和らげることのみであったのです。人間の幸せの原点は最も純粋なものを与え尽くす喜びです。そして、そうする価値のあるお方に出会う事です。

私たちはイエスキリストのみ救いをいただき、信仰を持ち、生活が変わったとしても、この方に出会ったことがそんなに価値のある出来事であったという「恵み」を忘れてしまいがちです。それはある意味で「新生経験」の甘さが原因しているかもしれません。あるいは惰性的信仰生活の結果であります。この「注がれたナルドの香油」の情景を見て、私たちの信仰が目覚めさせられるならば幸いです。そこには溢れ出る感謝と賛美があります。伝道者パウロは「それは、キリスト・イエスにあって私たちに賜った慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき代々に示すためであった」 (エペソ 2:7) と語りました。このような恵みと祝福があなたにも注がれますようにお祈りいたします。

小田 彰

(お知らせ)

\* 地区集会のご案内 (コロナウイルスの状況を見て休会にするかもしれません)

3月10日 (火) 13:00 CFI 横浜集会 (福音喫茶メリー TEL 045-231-6773)

3月18日 (水) 11:00 水曜礼拝、14:00 ジョイコーラス

\* 3月11日 (水) 19:00 東日本大震災復興支援超教派一致祈祷会 (淀橋教会)

〇昨年来、音声障害の癒しのために祈って参りましたが、だいぶ回復してまいりました。お祈りを感謝いたします。今月はもう一度2008年3月のメッセージを編集して用いさせていただきました。

三月二十九日

『野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい』

マタ六ノ二十八

「わたしは油が必要だ」と昔の修道僧はいった。そこで彼はオリブの若木を植えた。彼は祈った。「主よ、この若木の根が水を飲んで大きくなるには雨がいらす。静かな夕立を送りたまえ」と。そこで主は静かな雨を降らせたまうた。この修道僧はまた「わたしの木は太陽の光線がいます。太陽を照らしたまえ、主よ」と祈った。やがて太陽が照って来た。そして雨を滴らす雲をいろどった。「わが主よ、今度はその組織を引きしめるために霜を」と彼は叫んだ。見よ、小さい木は霜のためにきらきらと光ったが、夕べには枯れた。やがて僧は友の僧房を訪ねて、そのふしぎな経験を語った。友の僧は「わたしも一本の小さい木を植えたが立派に生きている。けれどもわたしはその木を神様に託してあります。木を創造した神は、人間よりも木の必要なものをよく知りましたもう。わたしは何らの条件もつけない。わたしは方法や手段を定めない。『主よ、木の要するものを送りましたまえ、暴風でも、また快晴でも、風、雨、あるいは霜でも、あなたはこれを造りましたもうた。それゆえあなたはすべてを知りましたもう』とわたしは祈った」と答えた。

## 荒野の泉

レテー・B・カウマン  
山崎亭治訳



福音文書刊行会

STREAMS  
IN THE  
DESERT

神愛  
普照